

令和4年度「地元の縄文」再発見プロジェクト事業 実施報告

木村 高*・岡本 洋*・永嶋 豊*・田中珠美*・山下琢郎*

1 事業の趣旨

世界文化遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」の登録を契機に、「縄文」への関心は高まっているが、構成資産を持たない市町村¹⁾にも素晴らしい縄文遺跡と遺物が多数あることを、一般県民はほとんど知らない。

考古学的な業務に携わる者ならば誰もが知っているこの事実を広く青森県民に知っていただくため、当センターでは、県内全市町村の縄文遺跡と出土品²⁾を活用した「地元の縄文」再発見プロジェクト事業を今年度から開始した³⁾。

本事業は、出土品展示会・体験学習会・講演会・シンポジウム・カード・インターネット等を通じ、身近にある「地元の縄文」の価値や魅力を県民にわかりやすく伝えるとともに、青森に生まれた子ども達が「青森の縄文にふれた原体験」を誇りに思うことができるよう、授業で直接触ることのできる教材(実物の縄文遺物を使用)も製作し、郷土愛の醸成、地域の活性化、多様な人材の育成につなげることを目的とする。

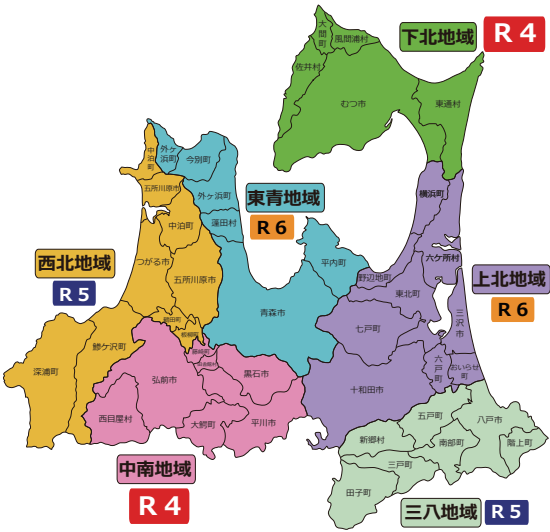


図1 6地域と40市町村および事業の実施年度

2 事業構成の概要

本事業は「地元の縄文」の活用促進を目的とする「取組1」と、「地元の縄文」の魅力の再発見と情報の発信を行う「取組2」で構成されている。取組1は県(当センター)と市町村が連携して活用の仕組みを構築していくための地域連携会議の開催、教材の製作～市町村への貸与、取組2は、「地元の縄文」再発見フェアの開催とあおもり縄文カードの作成、ホームページによる縄文遺跡と出土品の紹介である。

表1 事業の構成（令和4年度～6年度）

取組名		実施内容		予算額 (令和4年度)
取組1	活用促進	地域連携会議の開催（2回/年） 【開催地域】 令和4年度：下北地域・中北地域 【開催予定地域】 令和5年度：三八地域・西北地域 【開催予定地域】 令和6年度：上北地域・東青地域	教材の製作（60セット/年） ・実物の遺物を使用 【製作地域】 令和4年度：下北地域・中北地域 【製作予定地域】 令和5年度：三八地域・西北地域 【製作予定地域】 令和6年度：上北地域・東青地域	8,761千円
		再発見フェアの開催（2回/年） ・出土品展示会 ・体験学習会 ・講演会とシンポジウム 【開催地域】 令和4年度：下北地域・中北地域 【開催予定地域】 令和5年度：三八地域・西北地域 【開催予定地域】 令和6年度：上北地域・東青地域	情報の発信 ・あおもり縄文カードの作成(100種類/年) ・インターネットによる情報発信 【対象地域】 令和4年度：県内全域 【予定対象地域】 令和5年度：県内全域 【予定対象地域】 令和6年度：県内全域	

* 青森県埋蔵文化財調査センター

- 1) 青森県の市町村数は40であり、構成資産を持つ市町村は青森市・弘前市・八戸市・つがる市・外ヶ浜町・七戸町の6市町(15%)、構成資産を持たない市町村は34市町村(85%)である。
- 2) 本文中では文章の流れより、「出土品」という表現が相応しくない場合は、「遺物」と表現しているが、「遺物」は、「出土品」と同じ意味で用いている。
- 3) 事業計画は、令和4年度から令和6年度までの3ヶ年であり、事業費の二分の一は文化庁による国庫補助金「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業費」を活用している。

3 【取組1】活用促進

(1) 地域連携会議

本会議は、県内の文化財活用をめぐる現状と課題を、県と地元自治体で情報共有し、活用の仕組みづくりに向けた協議を行うものであり、県内の6地域での実施(2地域×3年=6回)を予定している。

今年度は本会議実施前の、5月13日に青森県庁で行われた「市町村文化財保護行政担当者会議」において、当センターの所管事業説明の中に本事業の概要説明を加え、連携体制構築の必要性を全市町村に呼びかけた。この後、7月と9月に県内の2地域(下北地域・中南地域)において地域連携会議を実施した(表2)。

会議では、本事業に関する詳細説明、開催地域におけるこれまでの発掘成果と出土遺物に関する概要報告、所蔵遺物の活用案の提示等を当センターが行い、「再発見フェア」開催地の文化財担当者からは埋蔵文化財の保護と活用に関する事例報告をいただいた。さらに、「再発見フェア」関連の協力体制について、市町村と協議した。

表2 地域連携会議の実施内容等 (令和4年度)

開催日	対象地域	開催施設	説明内容	会議参加市町村
7月1日	下北地域 (第1回)	むつ市 中央公民館 (むつ市)	県埋文「「地元の縄文」再発見プロジェクトについて」 県埋文「下北半島における発掘調査成果と出土遺物」 むつ市教育委員会(森田賢司) 「むつ市における埋蔵文化財の保護と活用」	むつ市 佐井村 東通村 横浜町
9月30日	中南地域 (第2回)	黒石公民館 (黒石市)	県埋文「「地元の縄文」再発見プロジェクトについて」 県埋文「中南地域における発掘調査成果と出土遺物」 黒石市教育委員会(鈴木徹) 「黒石市における文化財の保護と活用」	黒石市 平川市 弘前市 大鰐町 田舎館村 西目屋村



写真1 地域連携会議 (左：下北地域 右：中南地域)

(2) 教材の製作

小・中学校における社会科の授業等⁴⁾で活用可能な教材「あおり縄文遺物セット」を製作した。使用した遺物は全てが「実物」であり、「縄文」を視覚と触覚で直接的に体感することができる。

1セットは土器破片40点以上⁵⁾、石器10～12点(石鏃・石匙・不定形石器・磨製石斧・凹石等)で構成されている。

今年度の対象地域は下北地域と中南地域であることから、遺物は下北地域と中南地域の発掘調査による出土品を用い⁶⁾、下北地域用22セット、中南地域用38セットの計60セット⁷⁾を作製した。

指導者(授業を行う教員を想定)が安心して活用できるように、取扱説明書も添付した。貸与の開始は令和5年度からの予定である。

表3 教材の内容等（令和4年度）

対象地域	遺物を抽出した遺跡	1セットの内容	製作数	配布対象市町村
下北地域	古野(2)・古野(3)・涌館 熊ヶ平・大湊近川・内田(1)	土器破片40点以上 石器10～12点	22セット	むつ市・大間町・東通村 風間浦村・佐井村
中南地域	川原平(1)・川原平(4) 水上(2)・砂子瀬 扇田(4)・大平		38セット	弘前市・黒石市・平川市 西目屋村・藤崎町・大鰐町 田舎館村

4) 学校教育以外でも、行政が行う生涯学習イベントや、民間による社会貢献的催事などでも、幅広い活用が可能である。

5) 1クラスの児童・生徒の全員が直接触れる点数+教師用の大型破片数点。

6) 当センター刊行の発掘調査報告書に掲載されなかったものの中から高強度・高耐久なものを抽出した。

7) 製作数の比率は、令和4年段階で公表されている下北地域と中南地域の児童・生徒数および学級数を参考に算出した。



教材用資料の抽出



抽出した教材用資料



資料の梱包に関する話し合い



1学級に貸し出すセット

写真2 教材作製の状況

4 【取組2】魅力再発見・情報発信

(1) 再発見フェアの開催

①出土品展示会、②体験学習会、③講演会・シンポジウムの3要素で構成されるフェアであり、多くの世代が「縄文」を①見て、②触って、③考えることのできる内容とした。

今年度は下北地域⁸⁾と中南地域で開催した。両フェアとも盛況で、約400人の来場者があった。

8) 下北地域のフェアでは、考古学的な関連性が高い横浜町と六ヶ所村(ともに上北地域)を組み入れた。

① 出土品展示会

地元から出土した縄文土器等を数多く展示し、調査写真パネル等も用いた。露出展示を基本とし、「ガラス越しの存在」だった縄文遺物を「ごく間近に」見る事ができるようにしつつ、写真撮影も自由とするなど、制限を極力なくした⁹⁾。

展示室の数箇所には、「あおり縄文カード」(後述)を多量に詰め込んだ深鉢形土器(実物)を配置(図2)し、展示品を観覧しながら途中途中でカードを入手するという配付方法を採用した。

展示遺物

資料は当センターによる発掘資料を主体とし、土器を中心に、観覧者の興味・関心をひく土製品・石製品も数多く展示した。観覧者にとって石器は遺跡毎、地域毎の差違を把握し難いため、少数にとどめた。

土器については完形に近いものや外来系の要素を有するもの等、特徴が分かりやすい資料を選定した。石膏が経年劣化している古い発掘資料には修復と再彩色を施した。

当センターの所蔵資料が少ない市町村からは、所蔵資料を借用することで対象地域内の全市町村の出土品を展示することができた。

展示構成は、通史的に展示する方式は採らず、自治体ごと、遺跡毎の順に遺物を配置することで、観覧者が自分の「地元の縄文」遺物を容易に見つけられるようにした。

しもきた会場では560点の遺物を展示した。東通村、佐井村、横浜町の各教育委員会から所蔵資料を借用したほか、共催のむつ市教育委員会は国指定重要文化財・二枚橋(2)遺跡出土土面の自主展示を行った。

ちゅうなん会場では650点の遺物を展示した。黒石市、藤崎町、田舎館村の各教育委員会からは所



写真3 ポスターとリーフレット

(上: フェア in しもきた・下: フェア in ちゅうなん)

蔵資料を借用した。平川市教育委員会は、太師森遺跡、石郷(4)遺跡等の出土資料を自主展示した。

パネル写真

フェアは二日間という短期間の開催である上、資源節約の必要性も考慮し、パネル写真については発泡系ボードへの貼付やラミネート加工等を避け、厚手の上質紙にレーザープリンターで印刷したものを直接使用した。写真データは、2005年以前の調査遺跡についてはポジフィルムをスキャンして作成した。

- 9) 破損・盗難等の防止策として、ベルトパーテーションを用い、小型品については標本箱や透明ケース等に収めた。監視は主に業者が行い、当センターの専門職は観覧者と会話するような雰囲気での解説を行った。

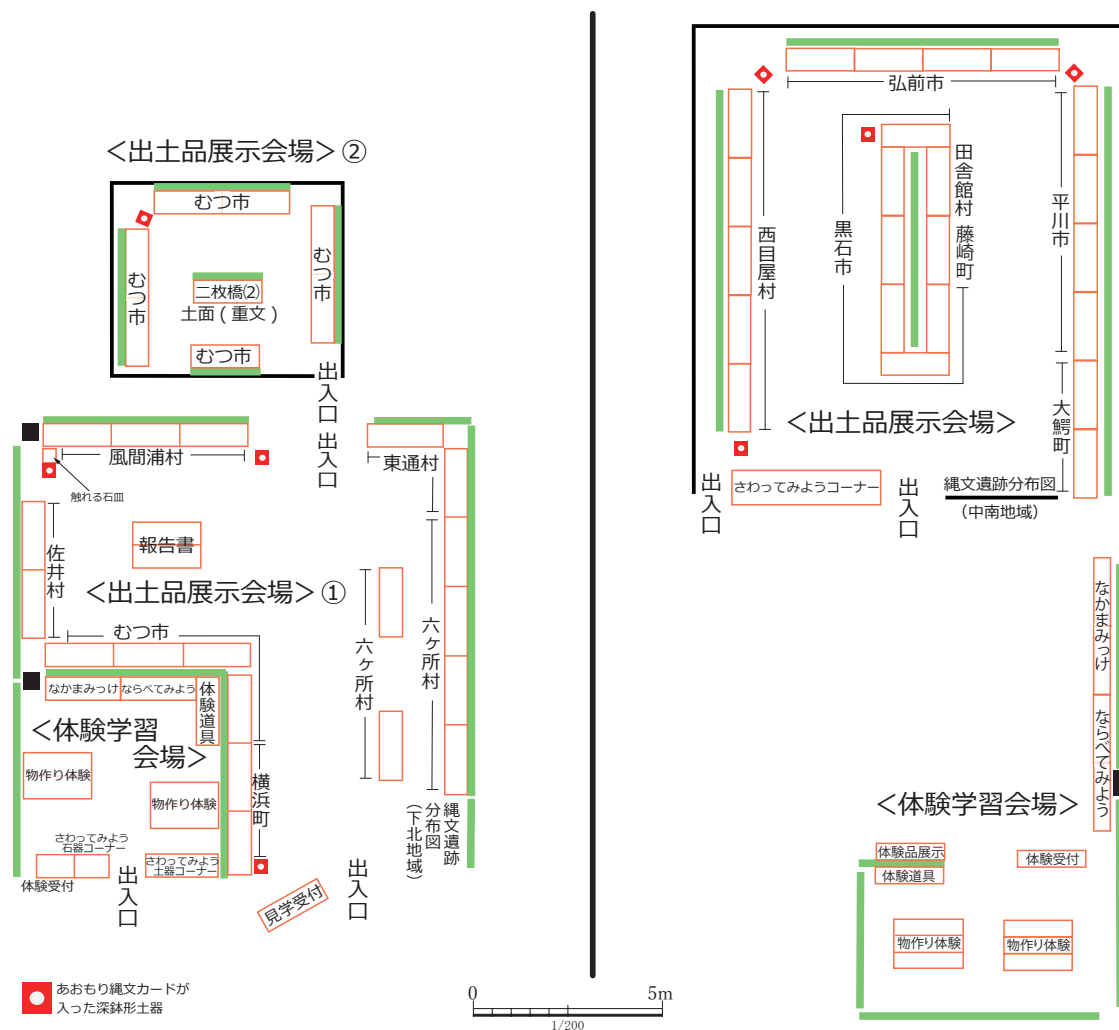


図2 会場レイアウト（左：しもきた会場 右：ちゅうなん会場）

しもきた会場のパネルはA3サイズを基本とし、172枚を展示した。遺跡の遠景と全景の写真を多用することで、どの辺りにある遺跡かを知ってもらうように努めたほか、作業風景の写真も極力取りあげ、発掘現場の臨場感が伝わるようにした。遺物出土状況の写真も積極的に展示した。

ちゅうなん会場では、しもきた会場よりもA2サイズパネルを増やし、164枚を展示した。文字による遺跡解説パネルを増やし、「あおり縄文カード」の拡大写真を掲示することで、注目してほしい「目玉」



1. 下北半島の形にレイアウトされた遺物展示会場



2. 風間浦村古野(2)遺跡・古野(3)遺跡の遺物展示状況



3. むつ市二枚橋(2)遺跡出土土面(重要文化財)展示会場



4. 「あおり縄文カード」が収められた深鉢形土器



5. 黒石市を中央に、中津地域の出土遺物を展示



6. 黒石市花巻遺跡の石棺墓ジオラマ



7. 中津地域の縄文遺跡地図を拡大展示



8. 年齢層を問わず人気であった縄文カード

写真4 出土品展示会の状況

(1~4: フェア in しもきた ・ 5~8: フェア in ちゅうなん)

表4 フェアの概要

対象地域		下北地域（第1回フェア）	中南地域（第2回フェア）
開催期間		9月17日（土）～18日（日）（9:00～17:00）	11月26日（土）～27日（日）（9:00～17:00）
フェア名称		「地元の縄文」再発見フェア in しもきた	「地元の縄文」再発見フェア in ちゅうなん
共催		むつ市教育委員会	—
開催施設名		むつ来さまい館（むつ市）	スポカルイン黒石（黒石市）
天候		17日：晴れ 18日：晴れ	26日：雨 27日：雨
観覧者数		395名（17日：110名 18日：285名）	395名（26日：178名 27日：217名）
印刷物		ポスター（B2判）・リーフレット（A4判）・レジュメ（A4判）	
広報		「教育広報あおりけん」（7月：事業の説明） 「広報広聴課Facebook」（8/25：フェアinしもきた・11/16：フェアinちゅうなん） 新聞広報「広報あおりけん」（8/16：フェアinしもきた・11/16：フェアinちゅうなん）〔東奥日報・デーリー東北・陸奥新報に掲載〕 FM青森（8/26・9/15：フェアinしもきた）・FMむつ（9/16：フェアinしもきた）・FM青森（11/24：フェアinちゅうなん）	
取材		東奥日報・青森テレビ・青森放送（全て17日〔土〕）	陸奥新報・津軽新報（全て26日〔土〕）
報道		東奥日報（9/18）・青森放送（9/27） 青森テレビ（9/29）	陸奥新報（11/27） 津軽新報（11/30・12/4・12/8）
① 出土品展示会	時間	9月17日（土）～18日（日） 9:00～17:00	11月26日（土）～27日（日） 9:00～17:00
	展示対象市町村	むつ市・大間町・東通村・風間浦村・佐井村 六ヶ所村*・横浜町*	弘前市・黒石市・平川市・西目屋村 藤崎町・大鰐町・田舎館村
	展示遺物数	560点	650点
	展示パネル数	172点	164点
	展示遺跡	むつ市（二枚橋（1）・涌館・熊ヶ平（1）・大湊近川・酪農（3）・上野平・内田（1）・内田（2）・高野川（3）・二枚橋（2）） 大間町（小奥戸（1）・白砂） 東通村（前坂下（13）・石持納屋・前坂下（11）・瀧之不動明・銅屋（1）） 風間浦村（沢ノ黒・古野（2）・古野（3）・潜石（2）） 佐井村（八幡堂・糠森） 六ヶ所村（表館（1）・幸畑（7）・千歳（13）・新納屋（1）・新納屋（2）・発茶沢（1）・上尾駁（2）・鷹架・富ノ沢（2）・原原農農場・大石平・沖附（2）・上尾駁（1）） 横浜町（林ノ脇・百目木（3）・松木）	弘前市（尾上山・神原（2）・沢部（2）・薬師・鬼沢猿沢・中崎館・野脇・蔵主町・十腰内（1）） 黒石市（板留（2）・一ノ渡・地藏沢・花巻・長坂（1）・白元（1）・築館・石名坂・石倉下） 平川市（永野・大面・五輪野・白沢・四戸橋・太師森・堀合（1）・堀合（2）・堀合（4）・李平（2）・小金森・八幡崎（1）・石郷（4）） 西目屋村（鬼川辺（1）・川原平（4）・水上（2）・大川添（3）・砂子瀬・川原平（6）・川原平（1）） 藤崎町（高倉・水木館） 大鰐町（砂沢平・大平・鶴ヶ鼻・駒木沢（2）） 田舎館村（垂柳・観妙寺・採集資料）
	主な展示品	むつ市（熊ヶ平（1）遺跡出土クッキー状炭化物・二枚橋（2）遺跡出土土面） 大間町（小奥戸（1）遺跡出土表館式土器・土器片鍾） 東通村（前坂下（13）遺跡出土北海道系土器・瀧之不動明遺跡出土大洞A式土器） 風間浦村（沢ノ黒遺跡出土片状耳飾・古野（2）遺跡出土榎林式期の土偶） 佐井村（八幡堂遺跡出土異形深鉢形土器・糠森遺跡出土青竜刀形土器・大型鐔形土製品） 六ヶ所村（富ノ沢（2）遺跡出土ヒスイ製大珠・上尾駁（1）遺跡出土鼻曲り土面） 横浜町（松木遺跡出土獣面突起付土器・サメの歯の穿孔装飾品）	弘前市（神原（2）遺跡出土幼児の歯形が残る粘土・薬師遺跡出土亀ヶ岡式土器） 黒石市（長坂（1）遺跡出土土器棺・一ノ渡遺跡出土ヒスイ製大珠） 平川市（大面遺跡出土線刻岩版・太師森遺跡出土キノコ形土製品） 西目屋村（川原平（6）遺跡出土狩猟文土器・川原平（1）遺跡出土遮光器土偶） 藤崎町（高倉遺跡出土十腰内Ⅰ式土器・水木館遺跡出土十腰内Ⅱ式土器） 大鰐町（大平遺跡出土土岩偶・駒木沢（2）遺跡出土土人面付スタンプ形土製品） 田舎館村（観妙寺遺跡出土土偶・菊助地内出土磨製石斧）
	その他	ジオラマ1点（狩りの場面） 二枚橋（2）遺跡出土土面は国指定重要文化財	ジオラマ5点（狩りの場面・縄文の集落・堀合遺跡の石棺墓・花巻遺跡の石棺墓・一ノ渡遺跡の配石遺構）
② 体験学習会	時間	9月17日（土）～18日（日） 9:00～17:00	11月26日（土）～27日（日） 9:00～17:00
	クイズ	ならべてみよう・なかまみつけ	
	ハンズオン	さわってみよう	
	ものづくり体験	アクセサリー作り・カラフルたくほん ミニチュア土器づくり	アクセサリー作り・JOMON缶バッジ作り
③ 講演会・シンポジウム	その他	ぬり絵作成	
	時間	18日（日） 13:00～16:30	27日（日） 13:00～16:30
	定員	80名（参加者70名）	100名（参加者77名）
	基調講演	「しもきたの縄文時代」 森田賢司（むつ市教育委員会）	「ちゅうなんの縄文時代」 鈴木徹（黒石市教育委員会）
	事例報告	「ひがしどおりの縄文時代」 小山卓臣（東通村教育委員会） 「まさかりの刃の縄文時代」 永嶋豊（県埋文センター） 「まさかりの柄の縄文時代」 岡本洋（県埋文センター）	「丘の縄文時代ー平川・浅瀬石川流域の縄文ー」 長尾智寿（平川市教育委員会） 「山の縄文時代ー白山山地と岩木山麓の縄文ー」 永嶋豊（県埋文センター） 「平野の縄文時代ー津軽平野の縄文ー」 岡本洋（県埋文センター）
③ 講演会・シンポジウム	シンポジウム	「再発見 “しもきたの縄文” ーまさかり半島の縄文文化を語るー」 パネリスト 森田賢司・小山卓臣・永嶋豊・岡本洋 コーディネーター 木村高（県埋文センター）	「再発見 “ちゅうなんの縄文” ー南津軽の縄文文化を語るー」 パネリスト 鈴木徹・長尾智寿・永嶋豊・岡本洋 コーディネーター 木村高（県埋文センター）

* 下北地域のフェアでは、考古学的な関連性が高い横浜町と六ヶ所村（ともに上北地域）を組み入れた。

資料を分かりやすくした。また、展示会場外の通路に調査風景等の写真や、昭和50年代に作成した空撮写真のパネルを掲示するなどして、雰囲気作りにも努めた。

その他の展示品

ジオラマを展示遺物の中に配置し、フェアでは展示できない「遺構」を理解してもらうことに努めた。

展示遺物のキャプションは「名称・出土地・時期」を記しただけの簡素なものであるため、考古学に興味がない人にも親しんでもらえるようにポップを活用した。

遺跡名だけでは出土地点がイメージできないので、展示遺物の脇に遺跡地図を置くことで出土地点を分かりやすくした。

展示会場内では縄文土器内からカードを引く形で「あおり縄文カード」を配布した(写真4-4, 8)。

来場者アンケート(結果)

アンケート結果では、しもきた会場、ちゅうなん会場の両展示とも「非常に満足」、「満足」がほとんどである。

しもきた会場の1日目の来場者は110名であったが、2日目はシンポジウムの開催日であることと、地元紙(東奥日報)の朝刊に本フェアの開催に関する記事が大きく掲載されたことも重なり、285名もの来場者数となった。

アンケートの記載には「すごい物が地元から出ていることを知って驚いた」「下北地域全体の縄文を知ることが出来た」「親子で楽しめる展示であり、その場で質問することが出来た」「展示物が多く、また展示方法も工夫されていた」など、当フェアの趣旨を体現するようなコメントが見られた。一方、「下北半島全域の縄文時代の遺物を見る機会がこれまでほとんど無かったので、貴重な展示であった」「地元で地元の展示を見られることが良い」との声は、当地域において常設的な展示施設が少ないこと、遺跡・遺物に触れる機会が多くないことが指摘されている可能性がある。

ちゅうなん会場の1日目は、雷を伴う悪天候であったが、来場者は178名と予想以上であり、2日目も雨天ではあったものの、217名もの来場者数となった。

アンケートの記載には、「地元になんか縄文遺跡があるとは知らなかった」「あおり縄文カードの素材となった遺物を見ることが出来た」「遮光器土偶やヒスイの玉はつがる市亀ヶ岡遺跡出土品だけだと思っていたので、他からも出土していることを知って感動した」「スタッフの説明がとても丁寧」「ポップが良かった」などの評価を得た。一方、「もっといろんな所で展示出来たら、もっとたくさんの人に知ってもらえるのでは」「もっと長い期間開催して欲しい」「開催を知る方法がもっとあったら良い、インスタとか」など、展示機会や開催期間、広報手段への要望もみられ、地域における埋蔵文化財活用への需要を感じることができた。

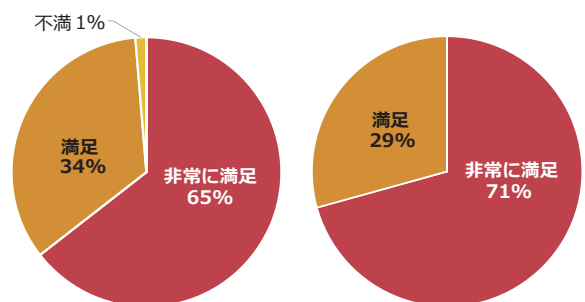


図3 出土品展示会のアンケート結果

(左: フェア in しもきた ・ 右: フェア in ちゅうなん)

② 体験学習会

地元から出土した実物の縄文土器や石器に触ったり、アクセサリーをつくったり、縄文クイズを解

くなどして、「縄文」に親しんでもらうことが主な目的である。土器をじっくり観察し、色や形、文様等、様々なものがあることを楽しみながら、理解してもらえるように心掛けた。

【クイズ】

ならべてみよう ヒントを手がかりに、5点の土器片を年代の古い順に並べ、その順番を解答用紙に記入するものである。使用する土器片は、できるだけ開催地域の遺跡から出土したものを選んだ。適切なものがない場合は近隣地域出土のものを使用した。解答用紙に地元の遺跡から出土した土偶の画像を使用したり、土器の出土遺跡を明記する等、「地元感」を出す工夫をした。

なかまみつけ 箱の中の30点の土器片から縄文土器を見つけ出し、その番号を解答用紙に記入する。縄文土器を1点でも多く見つけられるよう、30点のうち20点を縄文土器とした。縄文土器片は開催地域の遺跡から出土したものを使用した。縄文土器以外は、縄文がある弥生土器、無文の土師器、縄目のある須恵器である。「ならべてみよう」同様、「地元感」を出す工夫をした。

【ハンズオン】

さわってみよう 地元の遺跡から出土した本物の土器や石器に触る。復元した土器2、3点、石器は石鏃、石槍、石錐、石匙、スクレイパー、石斧、磨石、石皿を準備した。剥片石器は標本箱にセットし、礫石器はテーブル等に直に設置した。土器、石器それぞれの簡単な解説パネルを掲示した。

【ものづくり体験】

アクセサリ作り 乾燥すると固まる粘土で、円盤状土製品を真似たアクセサリを作る。乾燥に時間がかかるので、プラスチックパックに入れて持ち帰ってもらい、革紐を渡して、乾燥してから通してもらったようにした。



1. さわってみよう



2. ミニチュア土器づくり



3. なかまみつけ



4. カラフルたくほん

写真5 体験学習会の状況

(1～2: フェアinしもきた ・ 3～4: フェアinちゅうなん)

カラフルたくほん(しもきた会場)・JOMON缶バッジ作り(ちゅうなん会場)

色鉛筆を使ってカラー拓本をとり、缶バッジにする。拓本に使用した土器片は開催地域内の遺跡から出土したものを基本としたが、一部は近接地域のものも使用した。

ミニチュア土器づくり(しもきた会場) 乾燥すると固まる粘土でミニチュア土器を作る。乾燥に時間がかかるので、蓋付の使い捨てプラスチックカップに入れて持ち帰ってもらった。

【その他】

あおもり縄文カード クイズ・ものづくりの参加者に配布した。

ぬり絵 しもきた会場では作成、ちゅうなん会場では配布のみとした。

作品展示コーナー しもきた会場で使用した見本用ミニチュア土器等をちゅうなん会場で展示した。

【来場者アンケート(結果)】

しもきた会場では、ものづくり体験は周知不足もあり、参加者は多くはなかったが、土器の拓本を組み込んだ缶バッジ作りが好評であった。

アンケートの結果では、「体験学習会」については、「とても簡単わかりやすい」、「簡単ちょうどよい」が7割、「やや難しい」が2割を占めている。

ちゅうなん会場では、竹串・貝殻・縄で文様をつける「アクセサリー作り」を午前に行い、午後に土器の拓本を組み込む缶バッジ作りを行い、両日も盛況であった。「土器や石器をさわろう」のコーナーでは、「土器は何から作られているのか」といった質問や「実際に持ってみると重い」等の感想があり、こちらも好評だった。

アンケートの結果から、「体験学習会」については、「とても簡単わかりやすい」、「簡単ちょうどよい」が9割、「やや難しい」、「かなり難しい」が1割を占めている。

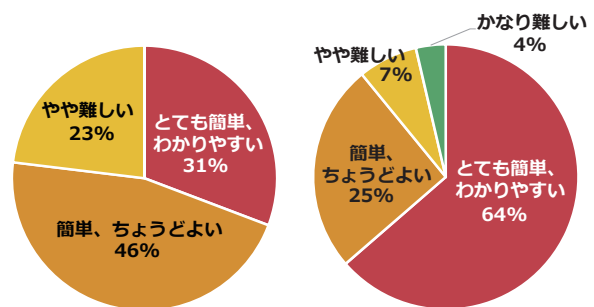


図4 体験学習会のアンケート結果
(左：フェアinしもきた・右：フェアinちゅうなん)

③ 講演会・シンポジウム

地元の考古学研究者による講演と当センター職員等による地元の縄文遺跡の事例報告後、シンポジウムでは「地元の縄文」に特化した考古学的議論と「地元の縄文」に関する今後の活用案を提示した。3時間30分という短い時間ではあるが、平易でありながら情報量が多い内容を目指した。また、県民が気楽に読むことのできるレジュメを作成し、会場で無料配布した(フェア終了後、ホームページで公開)。

しもきた会場では、森田賢司氏(むつ市教育委員会)による講演、小山卓臣氏(東通村教育委員会)と当センター所員(永嶋豊・岡本洋)による地元の縄文遺跡の事例報告、シンポジウムでは、当センター所員(木村高)をコーディネーターとして、森田・小山・永嶋・岡本の4名のパネリストが議論し、最後の約10分間は、パネリストが考案した縄文関連商品等の紹介で締めくくった。

森田氏による講演「しもきたの縄文時代」は、縄文遺跡の消長→当時の環境→渡海交易(石斧)→舟形土製品→「縄文遺跡群(三内丸山遺跡)」との関連、という刺激的な内容であったことから、聴講者の興味・関心は一気に高まった。



写真6 レジюме

(左：フェアinしもきた・右：フェアinちゅうなん)

事例報告は、下北半島を地区で三分し、それぞれの地区の特徴をストレートに話すことで、海に面した立地環境を最大限に活かした、下北地域らしい、ダイナミックかつ独特な縄文文化が浮き彫りとなった。

事例報告の後は、事前配付していた質問票(10人分)に対してパネリストとコーディネーターが回答した。

シンポジウムは、石斧石材の交易について→遺跡増減の背景について→未発見遺跡が多く眠っている可能性について→当時の食糧事情について→垂飾品の製作背景について→縄文関連商品について、という流れで議論した。

ちゅうなん会場では、鈴木徹氏(黒石市教育委員会)による講演、長尾智寿氏(平川市教育委員会)と当センター所員(永嶋豊・岡本洋)による地元の縄文遺跡の事例報告、シンポジウムでは、前回のフェアと同様に、木村高がコーディネーター、鈴木・長尾・永嶋・岡本がパネリストを務め、最後の約10分間は、パネリスト考案の縄文関連商品等を紹介した。

鈴木氏による講演「ちゅうなんの縄文時代ー石の文化ー」は、平川市と黒石市に所在する、石を用いた特殊な遺構(石棺墓・環状列石・大型配石遺構)を伴う4遺跡(太師森・堀合(1)・一ノ渡・花巻)の解説と、かつて中央の学会でも注目されていた花巻遺跡の学史上の重要性を熱く伝える内容で構成され、地域住民にほとんど知られていなかった特異な縄文文化の存在と地元における縄文時代研究の奥深さを「再発見」する内容であった。

事例報告は中南地域を地形で3区分し、下北地域とは大きく異なる、内陸の縄文文化の特性を鮮明に描き出すかたちとなった。



1. 講演会の状況(森田賢司氏)



2. シンポジウムの状況



3. 講演会の状況(鈴木徹氏)



4. シンポジウムの状況

写真7 講演会・シンポジウムの状況

(1~2: フェア in しもきた ・ 3~4: フェア in ちゅうなん)

事例報告の終了後は前回のフェアと同じく、会場から寄せられた10件の質問に回答し、シンポジウムは、石の文化(環状列石・石棺墓・配石遺構)のルーツについて→石棺墓の被葬者像について→環状列石の築造指示者像について→平等社会と地域のリーダーとの関係について→石の文化の中心地だったことについて→祭壇状の大型配石について→土偶について→縄文人の髪形・入れ墨・耳飾りについて→縄文関連商品について、といった流れで議論した。

【来場者アンケート(結果)】

しもきた会場のアンケート結果では、「講演・事例報告について」は、「非常に満足」56%、「満足」38%で合計94%と大半を占め、やや難しいが6%と概ね肯定的な評価を得た。講演・事例報告共に一般県民を意識して構成したことが良かったと考えられる。

アンケート内の声として、「講演・事例報告共に工夫されていた」「専門用語が少なかった」「地元の文化財担当者が身近な内容を話したのでわかりやすかった」といった評価と共に、「事例報告20分をもう少し長く25～30分で」との意見も寄せられた。

「シンポジウムについて」は、「非常に満足」72%、「満足」28%で合計100%である。過去の一般向けの講演会等よりも更に親しみやすい内容・構成を意識したことが良かったと考えられる。また、「コーディネーターとパネラーが、持ち味を発揮して古い時代を語るのがロマンチック」「堅苦しくない和やかな内容」「ストレートな発信が多く庶民的な内容」「下北地域に絞った内容を複数の研究者から聞いたのは良かった」「質問への回答・発表内容・縄文の商品化案が良かった」などの声があった。

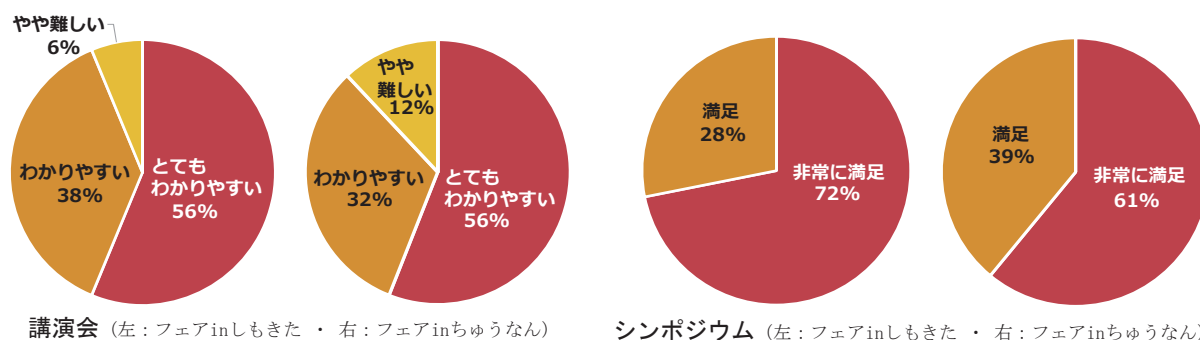


図5 講演会・シンポジウムのアンケート結果

ちゅうなん会場の「講演・事例報告について」は、「非常に満足」56%、「満足」32%で合計88%と大半を占めたが、やや難しいが12%見られ、しもきたフェアと比較して難しく感じた割合が増えている。また、「簡単な言葉で説明されていた」「面白くわかりやすかった」「縄文の全体像が理解できたように思う」「GoogleEarthを用いた遺跡の説明がわかりやすかった」といった評価と共に、「専門用語がわからない」「説明が早すぎる」「持ち時間の問題か、話の内容が飛び飛び」との意見も寄せられた。「シンポジウムについて」は、「非常に満足」61%、「満足」39%で合計100%である。また、「考古学の一端を垣間見ることが出来た」「楽しい内容だった」「コーディネーター・パネラーの縄文愛を感じた」「研究者同士の話が興味深かった」という評価と共に、「途中で質問できると良かった」「子供にもわかりやすい、短い紙芝居のような内容のものもあると良かった」などの声があがった。

(2) 情報の発信

①あおもり縄文カードの作成

「縄文」への関心が低い県民にも、出土品の魅力と価値を伝え、「縄文」に親しんでもらうとともに、自分の住む地域に存在していた出土品の素晴らしさや面白さに気づいていただくために製作した。

表面に遺物写真、裏面に小さな写真と平易な解説文、QRコード(後述するインターネットへのアクセス)を厚紙に印刷し、両面にPP加工を施すことで耐久性と高級感を高め、インターネットへの誘引ツールとしての役割も持たせた。

裏面の解説文は、考古学的情報や大きさに関する情報など、従来のカードで基本事項とされてきた内容を省き、センター職員に見立てたイラストや被写体が、遺物(自分)を解説したりつぶやいたりする体裁を採ることで、県民との距離を縮め、より親しみをもって受け入れられるように配慮した。



写真8 あおもり縄文カード
(上：表面・下：裏面)

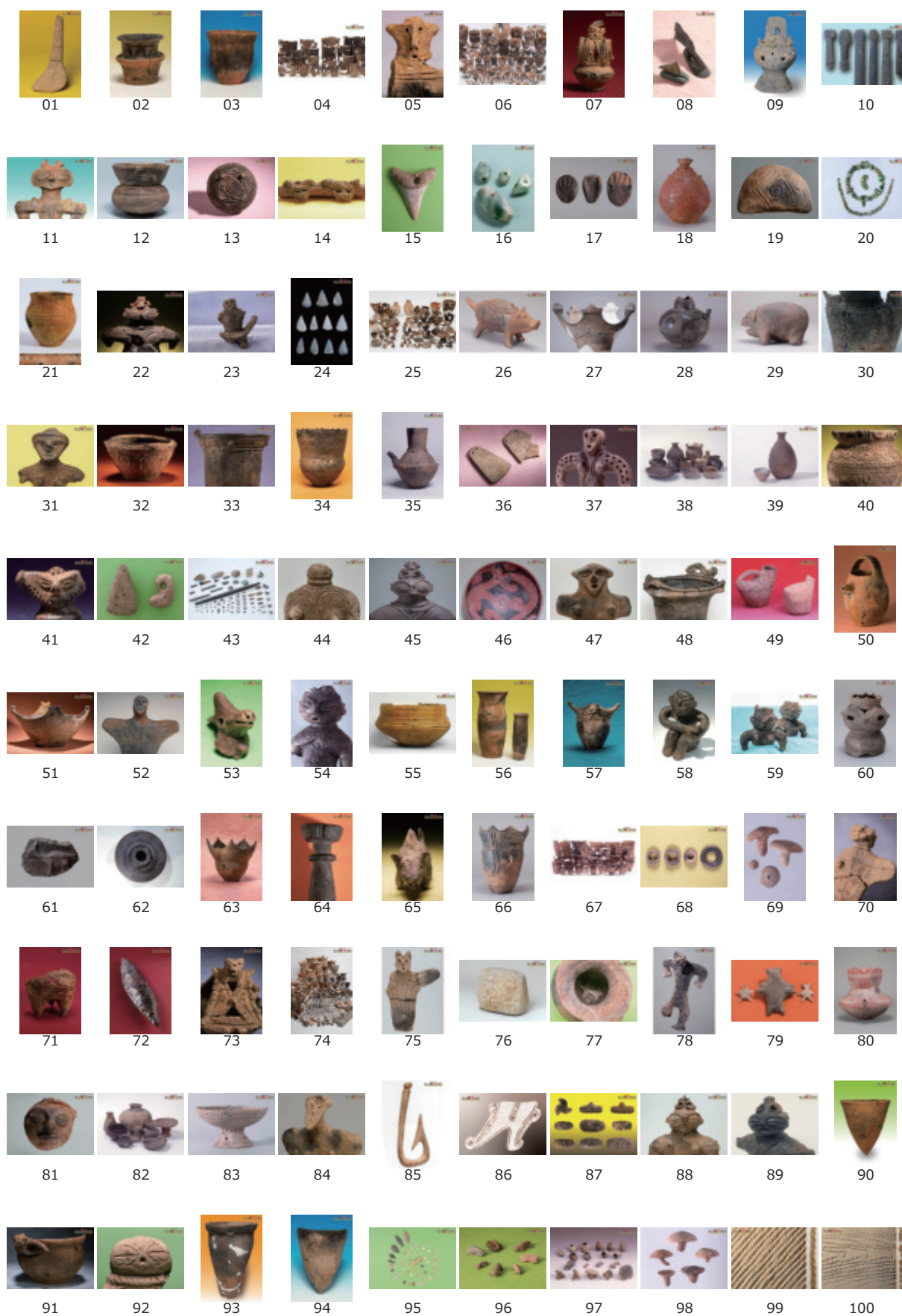


写真9 あおもり縄文カード (令和4年度制作版)

表5 カードの内容および配布施設等

市町村	カードNo.	内 容	配 布 施 設 名
佐井村	No.001	熊森遺跡出土 青竜刀形石器	十二湖エコ・ミュージアムセンター「湖郷館」
大間町	No.002	八幡堂遺跡出土 異形深鉢形土器	深浦町歴史民俗資料館
	No.003	小奥戸(1)遺跡出土 深鉢形土器	鶴田町歴史文化伝承館(旧永元小学校)
風間浦村	No.004	沢ノ黒遺跡出土 深鉢形土器	板柳町立郷土資料館
	No.005	古野(2)遺跡出土 土偶	新郷村山村開発センター 道の駅 しんこう 川代ものづくり学校
むつ市	No.006	内田(1)遺跡出土 いろいろな出土品	弘前大学北日本考古学研究所センター
	No.007	大湊近川遺跡出土 香炉形土器	田子町文化観光交流施設 Takko Visitor Center みろく館
	No.008	熊ヶ平(1)遺跡出土 石斧と擦切具	野面平遺跡出土 土偶
	No.009	外崎沢(1)遺跡出土 香炉形土器	アツプルドーム
	No.010	二枚橋(2)遺跡出土 石刀	三戸町立歴史民俗資料館
東通村	No.011	二枚橋(2)遺跡出土 遮光器土偶	史跡聖寿寺館跡案内所
	No.012	瀧之不助明遺跡出土 壺形土器	南部町立名川中学校図書室1階
	No.013	瀧之不助明遺跡出土 壺形土器	八戸ポータルミュージアム「はっち」
横浜町	No.014	松本遺跡出土 クマ形突起付土器	種差海岸インフオメーションセンター
	No.015	松本遺跡出土 サメの骨の垂飾品	八戸市博物館
	No.016	上尾殿(2)遺跡出土 ヒスイ製大珠	八戸市南郷歴史民俗資料館
六ヶ所村	No.017	大石平(1)遺跡出土 手形・足形付土版	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
	No.018	大石平(1)遺跡出土 赤彩切斷蓋付土器	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
	No.019	大石平(1)遺跡出土 三角柱状土製品	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
	No.020	川原平(4)遺跡出土 石製玉類	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
西目屋村	No.021	川原平(6)遺跡出土 狩猟文土器	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
	No.022	川原平(1)遺跡出土 遮光器土偶	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
	No.023	水上(2)遺跡出土 土偶	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
	No.024	十腰内(1)遺跡出土 石燧	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
	No.025	薬師遺跡出土 いろいろな形の土器	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
弘前市	No.026	十腰内(2)遺跡出土 イノシジ形土製品	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
	No.027	十腰内(2)遺跡出土 深鉢形土器	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
	No.028	十腰内(2)遺跡出土 注口土器	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
	No.029	尾上山遺跡出土 クマ形土製品	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
藤崎町	No.030	高倉遺跡出土 深鉢形土器	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
田舎館村	No.031	龍妙寺遺跡出土 土偶	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
	No.032	板留(2)遺跡出土 鉢形土器	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
黒石市	No.033	板留(2)遺跡出土 深鉢形土器	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
	No.034	赤坂遺跡出土 深鉢形土器	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
	No.035	上十川地区から出土 注口土器	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
	No.036	大田遺跡出土 岩版	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
平川市	No.037	堀合(1)遺跡出土 土偶	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
	No.038	石郷遺跡出土 いろいろな形の土器	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
	No.039	石郷遺跡出土 ミニチュア土器と壺形土器	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
大鰐町	No.040	大平遺跡出土 壺形土器	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
	No.041	駒木沢(2)遺跡出土 スタンプ形土製品	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
中泊町	No.042	柴崎遺跡出土 勾玉と磨製石斧	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
五所川原市	No.043	五月安冠遺跡出土 いろいろな石器と土製品	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
	No.044	観音林遺跡出土 土偶	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
	No.045	亀ヶ岡遺跡出土 遮光器土偶	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
つがる市	No.046	亀ヶ岡遺跡出土 漆塗浅鉢形土器	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
	No.047	石神遺跡出土 板状土偶	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
	No.048	石神遺跡出土 深鉢形土器	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
鯉ヶ沢町	No.049	餅ノ沢遺跡出土 注口土器	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)
	No.050	新沢(2)遺跡出土 把手付注口土器	八戸市埋蔵文化財センター(尾川縄文館)

※製作種類の数は、フェアや教材作製の実施地域のことを若干多く設定している。令和4年度は北地域と中南地域の製作種類数を多くした。

【配布効果】

フェアの出土品展示会場において、実物の縄文土器の中から「あおり縄文カード」を引く仕掛けは、観覧者から好評を得た。

SNS上では、自身のあおり縄文カード収集状況や各配布施設のカード残量や配布終了情報が多く見られた。更に配布先の資料館等で学んだことやカード配布地域でのグルメ情報等の発信が特に目に付いた。「コロナ禍で県外等遠方への旅行が難しい中、カード収集が主目的ではあるものの、足下の青森県内全域を巡ることを通じて、新たな発見・地元の魅力を再発見することが出来た」、との声も寄せられた。カードを通して「地元の縄文」を学び、地域を知り、地域の経済を回すといったことに、少なからず貢献できたようである。

また、県外にも本カードを求める人が現れるなど、あおもり縄文カードが県内各地の縄文文化の認識向上に一役買うことが出来たようである。少ないながら、全100種をすべて集めた方もいるようである。

【報道】

新 聞 デーリー東北(9/10)・東奥日報(9/15 第1面)・朝日新聞(9/17)・読売新聞(10/2)

陸奥新報(10/16)・日本経済新聞(10/19)

テレビ 青森放送(9/27「RABニュースリーダー」ミニ特集)・青森テレビ(9/29「わっち!!」ミニ特集)

ラジオ NHKラジオ第1 (10/11「マイあさ!」(全国版))

②ホームページ

インターネットを利用した広報として、「再発見フェア」や「あおり縄文カード」などの取り組みを発信した。ホームページの制作は外部に委託し、運用は当センターが行っている。「再発見フェア」の開催や「あおり縄文カード」の配布案内を掲載後は、ホームページの訪問数・訪問者数ともに増加しており、訪問者数は前年度よりも増加している。

今のところ、画像と情報は基本的に、あおり縄文カードの内容であるが、今後は「遺跡」に関する情報を加えていく予定である。



図6 「地元の縄文」再発見ホームページ(1)
(トップページ)



図7 「地元の縄文」再発見ホームページ(2)

(左：地域の一覧ページ・右：個別資料のページ)

＊現在は追加画像を製作中

表6 令和3～4年度のホームページ訪問者数
(令和4年度は2月までの集計)

年度	月	HP 訪問数	訪問者数	1日平均	備考
令和3年度	4	1,574	777	52.5	
	5	969	534	31.3	
	6	1,560	872	52.0	
	7	1,649	920	53.2	
	8	1,881	935	60.7	
	9	1,654	822	55.2	
	10	1,831	967	59.1	
	11	1,722	920	57.4	
	12	1,745	870	56.3	
	1	1,641	858	53.0	
	2	1,610	856	57.5	
	3	1,628	904	52.6	
令和4年度	4	1,611	920	53.7	
	5	1,517	920	49.0	
	6	1,606	987	53.6	1)
	7	1,946	1,226	62.8	
	8	1,811	1,061	58.5	2)
	9	3,448	2,248	115.0	3)
	10	3,431	2,155	110.7	
	11	2,915	1,735	97.2	4)
	12	2,427	1,461	78.3	
	1	2,423	1,518	78.2	
	2	2,083	1,299	74.4	
	3	—	—	—	
令3合計		19,464	10,235	53.4(平均)	12ヶ月分
令4合計		25,218	15,530	75.6(平均)	11ヶ月分

5,754増 5,295増

1) 6月：これまでのHPをリニューアル

2) 8月末：『「地元の縄文」再発見特設サイト』をアップ

3) 9月上旬：「あおり縄文カード」配布開始、9月17～18日：再発見フェアinしもきたを開催

4) 11月26～27日：再発見フェアinちゅうなんを開催

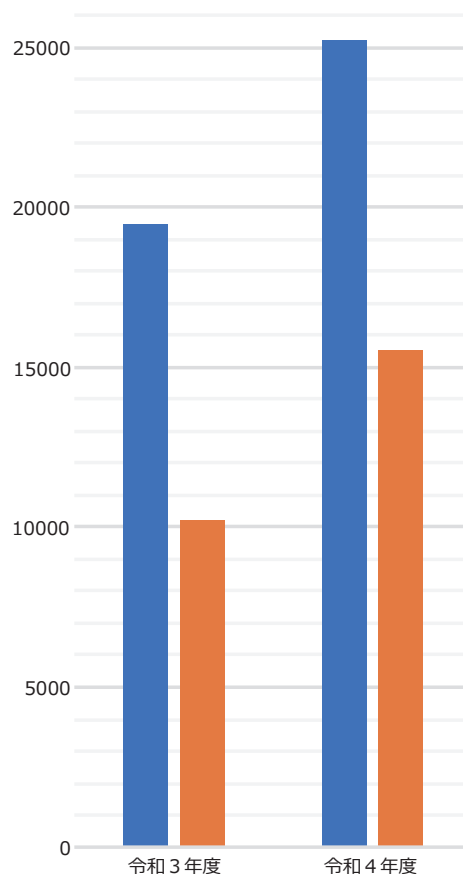


図8 過去2年の訪問数と訪問者数

(■訪問数 ■訪問者数 令和4年度は11ヶ月分の集計)

＊訪問数……1日あたりのアクセス回数(1日1人5回アクセス=5)

訪問者数……1日あたりの訪問者の人数(1日1人5回アクセス=1)

5 「地元の縄文」再発見プロジェクト1年目を終えて

事業の目的に沿った詳細な評価については、最終年度の報告で総括することとし、ここでは事業の1年目ならではの気づき、思考、展望などを列記することで、来年度の事業につなげたいと思う。

【取組1】活用促進

(1) 地域連携会議

当センターと市町村との関係について振り返ってみると、かつては発掘作業員の募集や雇用説明会の会場確保、発掘調査中の通信関係等々、市町村教育委員会の協力の下で発掘調査が実施される状況があった。そのような「連携」のおかげもあって、発掘調査のたびに人的な接触は必ず生じ、互いの顔は常に見えていて、地元の出土品をめぐってのフリートークは、意識せずとも自然に行われていた。

しかし近年、世の中の様変わりにより、今では発掘調査時に地元市町村の方々と顔を合わせる機会も少なくなり、地元の出土品について会話する機会などはほとんど無くなってしまっていた。

「地元」との関係性が希薄となりつつある現状の中で、今回開催した地域連携会議は、地元文化財活用の重要性について、共通理解を再確認する契機になったと同時に、近年、疎遠気味だった当センターと市町村との一定の繋がりも生まれ、非常に実り多いものであった。

文化財の活用、特に考古資料の活用にあたっては、一市町村単独よりも、「連携」しながら実施する方が効率的であり、内容的にも充実することは間違いない。市町村ごとに様々な事情があるにせよ、今後も県と市町村、そして市町村間は互いの「距離」を縮め、恒常的な「連携」の下、文化財活用の体制づくりに臨む必要があると感じた。

(2) 教材製作

下北地域22セット、中南地域38セットの計60セットの教材を製作した。

発掘調査報告書に掲載されなかった膨大な資料の中から教材を抽出する作業(第一次抽出)は、力と体力、気力を必要とする業務であったが、単純作業のために、さほど悩むことは無かった。しかし、教材となる資料を確定する作業(第二次抽出)においては、児童・生徒の反応や、この遺物で果たして授業は盛り上がるのか…など、様々な反応が気になり、悩むことが多くなった。

1セットの中における土器と石器の組み合わせに問題が無いか、この土器片が手元に来た場合、児童・生徒ががっかりしないか、等々、悩みは尾を引くことになったが、「楽しい学びと良い思い出」は、最終的には授業の内容次第であると考えに至った。

教科書やガラス越しの遺物を見て獲得する知識とは異なり、実物を見て、触って感じ取った知識は、感動と共に深い記憶として、生涯の財産になるのではないか。当センターができることは、素材と拙い取扱説明書の提供に過ぎないが、教材の配布後は、実際に授業を行った教師達から改善点などについてご教示を賜りたいと考えている。